

【編集後記】

本号も第7号に続いて三浦國雄先生から玉稿をいただくことができた。三浦論文は2017年12月16日に皇學館大学神道研究所で開かれた「神道における道教受容研究の現在」と題された公開学術シンポジウムでの口頭発表に基づくとのことで、今回、本号に論文を掲載させていただくにあたり、皇學館大学の松下道信氏のご理解をいただいた。記して謝意を表したい。

魏斌氏の論文翻訳は、2017年3月のパリの会議「第2回日仏中国研究者会議」で魏氏と討論した際に出たアイデアを実現させたもの。魏氏は日本語の研究をよく咀嚼しており、その堅実な考証は敬服に値する。しかも社会史的な手法で茅山が上清派の聖地たるゆえんを解明しており、私どもの研究にたいへん参考になる。訳文は魏氏の修訂を経ている。

土屋論文は、唐の長安の東明観を検討しているが、本年の第63回東方学者国際会議の「国家と儀礼—東アジアの中の日本古代文化（企画責任者：大津透）」で来日した雷聞氏との話でうかがったところでは、長安の道観関係は新出未発表史料が少なくないとのことで、長安の道観研究における出土文献研究の重要性を痛感している。

酒井論文は、歴史上で有名な福地の張公洞の実地調査報告で、研究的興味を強くひかれる内容となっている。

石野論文は、2017年のパリの会議での口頭発表に基づく。清末の「巡礼ガイドブック」『参学知津』の豊富な内容に驚かされるが、これを内藤湖南が見ていたというのも興味深い。『参学知津』が見やすいかたちで出版されることを期待したい。

本号は本来、2018年3月に2017年度の成果報告として発刊する予定でしたが、編集部諸事情で遅れてしまいました。執筆者および関係各位にお詫び申し上げます。制作には古賀弘幸氏にご協力いただきました。記して謝意を表します。(MT)